

色ばんでやを立ち上らない譯に行かなかつた。と、レムブケは直ぐおとなしくなつた。が、その代り今度は、感傷的な心持に移つて、すゝり泣き（本當にすゝり泣き）し始めた。ユーリヤ・ミハイロフナの深い沈黙にもう我慢し切れなくなつて、我れと我が胸を叩きながら、やゝ五分間ばかり泣き續けた。その中に到頭彼は取り返しのつかない失策をしてつた。つい、ピョートル・ステパーノフに對する嫉妬を口にしたのだつた。自分でも仕様のない馬鹿を言つたと氣が附くと、彼は愈々狂人のやうに猛り立つて、『神を否定するやうなことは許して置けない。僕は、お前の客間に集つて来る、不信仰の徒をすつかり追ひ散らしてつてやる。一體知事たるものは神を信じねばならぬのだ。随つて知事夫人もまた同様でなければならぬ。僕は、あの若い奴等が堪らない程厭やなんだ。ねえ、夫人、お前は自分の品位を保つ上から言つても、良人の上に心を使つて、よしや良人が手腕のない男だつたにしても（でも、僕は決して手腕のない男ぢやない）その能力を辯護するのが當り前ぢやないか。所が、此の町の者等が、僕を輕蔑するやうになつたのは、つまりお前がしたんだよ。お前が彼奴等をあんな風にしてつたんだよ』と、彼は叫んだ。そして尙ほこんなことをも續けて言つた。婦人問題など言ふものは、揉み潰してやる。あんなものは痕形もないやうに根絶してやる。

あの愚にもつかない婦人家庭教師の慈善會などは、明日にもきつぱり差止めて追ひ散らしてつた（女教師など何うなつても構ひはしない）翌朝にも早速、女教師等に出會ひ次第、『哥薩克をつけて州外へ放逐してやるんだ。』意地にも屹度さうして見せる』と彼は金切聲を上げた。『ねえ、夫人、お前は知つて

ゐるかね。此の町の工場では、お前の好きなやくざ連中が、職工共を煽動してゐるのだよ。可いかい、僕はあのやくざ連の名前を四人まで知つてゐるよ。あゝ、僕はもう氣が狂ひさうだ。もう駄目だ、もう駄目だ——』

でも、此の時、ユーリヤ・ミハイロフナは、突然沈黙を破つて、嚴然たる調子で言つた。

『わたしもそんな大それた陰謀のあることは知つてます。けれどもそれは、皆つまらないことで、貴方は餘りに眞面目に取り過ぎてゐらつしやる。尙ほあの悪戯者に就いては、わたしは四人ばかりでなく、みんな残らず知つてます。（彼女は嘘を吐いてゐるのである）ですけれどもそんなことに氣など狂はずやうなことは決してありません。却つて益々、自分に信頼して、萬事圓滿に解決をつける積りでゐます。つまりあの若い人達を勵まして理性に目醒めしめ、その上で突然あの人達の計畫が暴露したことを證明して、合理的なもつと光明的な事業に貢献するやうに彼等を啓發してやるのです』

あゝ、此の時レムブケの心持はどんなだつたらう。ピョートル・ステパーノフは、——又しても自分を騙したんだ、あの男は自分に話したよりもすつと早く、そしてモツト詳しく此の女にいろんなことを打明けてゐるんだ。屹度あの男こそかうした不逞な計畫の首唱者に相違ない——と想う思つて、まるで氣が狂ひさうになつた。『覚えてゐる、此の頑愚な意地悪女めが』と、一度に總ての制縛を断ち切つて、彼はかう叫んだ。『僕は今直ぐ、お前の汚ららしい戀人を引捕まへて、足枷を彼めて監獄へ打ち込んで了ふぞ。でなければ、——僕は、たつた今お前の眼の前で、此の窓から身を投げて了ふぞ。』

此の長たらしい愚痴に對する答へとして、ユーリヤ・ミハイロヴナは、憤りの餘り顔を眞蒼にしな  
がら、いきなり爆發したやうに高らかに笑つた。それは、十萬ルーブリからの年俸で招聘された巴里の  
女優が、佛蘭西劇場で、男たらしの女に扮して、愚かにも嫉妬など起した自分の良人を、面と向つて嘲  
り笑ふのとそつくり其儘な、時には低く搖れたり、時には高く反響したりするやうな、長い／＼笑ひで  
あつた。

レムブケは、窓に身を躍らせようとしたが、突然、丁度釘付けにされたやうに立止つた。そして、兩  
手を胸に組んで眞蒼な顔をしながら、尙ほ笑ひ續けてゐる夫人を、物凄しい眼で見据ゑた。「覺えてろ、ユ  
ーリヤ、覺えてろ……」と、彼は、喘ぎながら哀願するやうな聲で云つた。「覺えてろ、俺だつて何かし  
てやるぞ」しかし、此の最後の言葉に續いて起つたもつと烈しい新たな笑ひの破裂を聞くと、彼は齒を  
食ひしばつて唸き聲を立てながら、いきなり猛然と躍り蒐つた。が、それは窓の方へではなく、夫人に  
拳を振り上げながら飛びかゝつたのだつた。でも彼は、それを打ち下ろしはしなかつた。——道にそん  
なことはしなかつた。決してそんなことはしなかつた。たゞ拳を振り上げたゞけで、それつ切りで彼の  
力は盡きて了つたのだつた。自分が一體何をしてゐるのかも判らなくなつて、書齋へ駆け込み、いきな  
り着のみ着のまま、用意してある寢床の中に突伏しに倒れた。そして打ち震ふ手で寢布を頭から引つ被  
つて、そのまゝ二時間ばかりもちつとしてゐた。——睡むるでもなく、考へるでもなく、胸には石のや  
うな重い感じを、心には少しも動かぬ暗い絶望をいだきながら……。時々彼は、全身を苦しげに、熱病

やみのやうにびく／＼と慄はせた。何だかまるで取留めのない、たわいのない物が、ひよい／＼と心に  
浮んで來た。十五年前、彼得堡にゐた時、彼の家にあつた、長針のとれた古い掛時計のことを想ひ出す  
かと思ふと、今度は、ミリブアーと言ふ陽氣な役人の事だの、その男と一緒に、アレクサンドロフスキ  
イ公園で、一度雀を捕へたことだの、捕まへはしたものの、二人の中の一人は、モウ大學助教授の身分  
だといふことに氣附いて、公園の隅々まで響き渡るやうな聲で笑つたことなども思ひ浮べられた。  
私の想ふには、彼は、朝の七時頃になつてやつと寢入つたに違ひない。而も、自分では氣も附かずに、  
いろ／＼な快い夢を見ながら、いゝ氣持で寢入つたに違ひない。

十時頃に目覺めた彼は、矢庭にけたましく寢床から飛び起きたが、昨夜のことが、すべて一時に想  
ひ出された。そして、彼は自分で、自分の頭をびしやりと平手で叩いた。朝飯もしたゝめなかつた。プ  
ルーメルにも、警察署長にも、閣下は今朝の會議には是非御臨みになることになつてゐますと知らせに  
來た官吏にも、誰にも彼にも會はなかつた。そして何一つ聞かうとも理解しようともしないで、彼はま  
るで狂人のやうに、ユーリヤ・ミハイロヴナの室に駆け込んだ。其處には、ソフヤ・アンドロヴ  
ナといふ、早くからユーリヤ夫人の食客になつてゐる、名門出の老婦人が居合はせて、夫人はもう十時  
頃に、大勢連れで三臺の馬車に乗り、スクブレーシニキイのブルツラ夫人を訪問に行かれたと言つた。  
そしてそれは、二週間後に開かれることになつてゐる、次回の、第二回の慈善會々場に當てられるべき  
スタヴローギン家の模様を檢分するため、三日前に當のブルツラ夫人と約束してあつたことだと説

明した。これを聞くと、レムブケは仰天して、すぐ書齋に引き返すや否や、大急ぎで馬車を命じた。彼はおち／＼待つておられない程だつた。彼の心は、ユーリヤ・ミハイロヴナに憧れ切つてゐたのだつた。——たゞ一目彼女の顔を見て、五分程でもその傍にゐたら好いのだつた。『さうしたら、あの女は、或は自分の方をちらりと見て、自分の姿に気がついて、以前のやうにっこり笑つてくれるかも知れない、許してくれるかも知れない。——おゝ。……馬の用意はまだか、何うしたのだ？』彼は卓の上に置いてある厚い本を機械的にめくつて見た（彼は時々、かうして本で占ひをした。それは、あてすつぽに本をめくつて、右側の頁の上から三行ばかり讀むのだつた）次ぎのやうな文句が出て來た。一切は、あらゆる世界に於て優れたるが中にも最も優れたるものゝために存す——ヴォルテルの（カンディー）——。

彼はべつと唾を吐いて、馬車の方へ急いで行つた。

『スクヱレシニキイだ』

後で馭者の話した所によると、彼の主人は、途中しつきりなしに急ぎ立てゝゐたが、馬車が邸宅へ近づき始めた頃、突然轅を轉じて、再び町へ引返へせと命じて、『もつと早く、お願いだからもつと早く』と言つたさうである。すると、町の城廓まで行かない中に『旦那様は、わたしに又停めると有仰つて、馬車から出られると、道を横切つて畑の方へいらつしやいました。わたしは、何處かお悪いのぢやないかと思つて居りますと、旦那様は、ちつと立止まつたまゝ、一心に花を見つめてゐられるのでした。さ

うして長い間立つてゐられますので、わたしも本當に妙だたと思つた位でした。これは馭者の陳述であつた。私はあの朝の天氣を覚えてゐる。うそ寒い晴れ渡つた、しかし風立つた九月の日であつた。道の外へ踏み出したレムブケ氏の前には、もう穀類は疾うに刈り取られて了つた素裸かな野の荒寥たる景色が展開してゐた。風は、唸き聲をたてながら、萎れ行く黄色い草花の、見すばらしい残骸を揺がして行つた。レムブケは、自分の身の上を「秋」と霜とに打ち挫かれた見るかけもない野の花の運命にでも較べてゐたのであらうか。何うもさうは思はれない。いや、寧ろ確かにさうではないと考へる。例の馭者を初め、其の時署長の馬車に乗つてやつて來た、第一課の警部の證言もあるけれども、しかし彼は、花のことなどはまるで覚えてゐなかつたに相違ない。此の警部は後で、知事閣下は、確かに一把の黄色い花を手にしてゐられたと斷言するのだつた。此の男は、グシーリイ・フリブスチエーロフと言ふ、自分の職務に至大な誇りを感じてゐる行政官吏で、此の町に來てからまだ日も浅いが、職務執行に掛けては、一寸類のない程の熱心と、一種猛烈な野猪的な遣り口と、何時も酔拂つてゐるやうな様子とで、既に廣く名を知られてゐた。彼は馬車から飛び下りると、知事閣下の奇妙な様子を別段變だとも思はず、少し狂的な、しかし信念に充ちた表情をして、「市中に暴動が起りました」と、一息に言つてのけた。

『えつ？ 何だつて？』と、レムブケは嚴めしい顔附をして其方へ振り向いたが、少しも驚いた様子もなく、馬車や馭者の事も忘れて了つたかの如く、まるで自分の書齋の中にでもゐるやうな態度であつた。

『第一課警部フリブスチエーロフと申す者です、閣下、市中では暴動が起つて居ります』

「フリプスチエール（獨逸語で海賊の意）？」レムブケは物案じ顔にかう訊ね返した。

「はい、左様で御座います、閣下。シビグーリンの職工共が暴動が起て居りますので」

「シビグーリンの職工共が……」

「シビグーリン」と言ふことを聞いた時、彼は何か或物を想ひ出したらしかつた。彼は、ぎくりとして、額に指を當てた。「シビグーリン！」やがて無言のまゝ、尙ほ物案じけな様子で、彼はやをら馬車の傍へ歩み寄り、その中に腰を下すと町へ歸るやうに命じた。警部も同じく其の後から馬車を走らせた。

私の想像では、レムブケの心には、道々いろ／＼奇抜な物象や、いろ／＼の想念が浮んで來たに相違ない。けれども、彼が知事邸の前の廣場へ馬車を乗り入れた時、果して何か確乎とした想念や一定の意圖を持つてゐたか何うか甚だ疑問である。隊伍を整へて併び立つてゐる「暴動者」の群や、巡查の列や、途方にくれたやうな顔附をした（或は故意と、途方にくれた顔をしてゐたのかも知れない）警察署長や、自分の上に集中された一同の期待の色などに氣がつくと、彼は俄かに全身の血が心臓へ押し寄せせるのを覺えた。

「帽子を脱げッ」と、彼はせい／＼息を切らしながら、殆ど聞きとれない位の聲で言つた。

「膝を突け」と、今度は、思ひがけなく、自分でも思ひがけない位に衝走つた聲で叫んだ。これに續いて起つた事件の結末も、或は此の思ひがけないと云ふ點に起因してゐるのかも知れない。それは丁度謝肉祭の山遊びの時など、高い丘から下り始めた橋が、途中で止まるなど、言ふことは、到底出來ないの

と同じであつた。それに尙ほ更ら都合の悪いことには、是迄のレムブケは、いつも晴れ／＼とした樂天家として知られた人で、嘗て一度も人を怒鳴りつけたり、地團太踏んだりした事がなかつた。かう言ふ人間は、若し何うかした拍子に、橋が綱を切つて坂を下り始めたら、それこそ一倍危険なのである。彼の目の前には、一切のものがぐる／＼と回轉し始めた。

「フリプスチエール（海賊共）!!」彼は、前よりも一層衝走つた、一層馬鹿けた調子でかう喚んだが、突然その聲はぶち切れて了つた。彼はまだ自分が何を仕出來すかを知らなかつたけれども、やがては何か屹度仕出來すに相違ないと言ふ事を全身に感じたが、其處に突つ立つてゐた。

「おゝ神様！」といふ聲が群集の中から聞えた。一人の若者が十字を切り始めた。三四人の男は、本當に膝を突かうとしたが、大部分の者は、どつと三歩ばかり前へ進み出たをして、一齊に皆、がや／＼と叫び出した。

「知事様、……わたし達は、一期間の約束でしたのに、……支配人が……いやそんなことを有仰らずに下さい……」とか何とか言ふのであつた。けれども、何一つはつきりとは聞き分けられなかつた。

可哀相に、レムブケは、何とも出來なかつた。彼はまだ花を手にしてゐた。先刻、ステバン・トラフイモーギ一チが、囚人馬車を信じて疑はなかつたやうに、暴動の起るのは、彼に取つては明々白々の事實だつた。而も、眼を眞丸くして彼を見詰めてゐる「暴徒」の間を、その「煽動者」たるビョートル・ステバン一チが、——昨日から一分間も忘れることの出來ない。憎んでも憎み足らないビョートル。

ステパノーヰチが、彼方此方と奔走してゐるやうに彼には思はれるのだつた。

『答だ！』と、彼は、もう一層思ひがけなくかう叫んだ。死んだやうな沈黙が襲うた。

私が知り得たいろくの事實と、及び君自身の推測とから、事件の前年は、かういふ風にして起つたものらしかつた。しかし、これから先は、私の推測も、聞き知つた事實も段々怪しくなつて行くのである。でも、二つ三つは、確かな事實が無いでもない。

先づ第一に餘り早過ぎると思はれる位、答が此の場面へ現れて来た。これは、機敏な警察署長が、前以つてそれを豫期しながら用意してゐたものに相違なかつた。尤も、實際答の罰を受けたのは、やつと二人位で、三人とはなかつたやうに思ふ。此の事は確かだと断言して置く。暴徒がすつかり、少くとも半分位は處罰されたと言ふのは、全くの嘘である、それから又、丁度傍を通りかかつた一人の貧しいけれども品位のある婦人が捕へられて、卽座に答打られたといふのも、矢張り同様に根も葉もない馬鹿げた噂である。所が、それから暫く経つて、此の婦人のことが、彼得堡の或新聞の通信欄に載つてゐるのを、私は實際に見た。それから町の墓地にある慈善院に勤めてゐる、アヴドーチャ・ベトローヰナ・タラプイギナと云ふ婦人に就いても、次ぎのやうな噂が傳つた。此の婦人が友人を訪問しての歸途廣場を通りかかつたので、さう言ふ場合に於ける極めて自然的な好奇心にそゝられて、彌次馬連を押しわけて前へ出た。そしてその場の光景を見るや、「まあ何と云ふ淺ましいことだらう!!」と叫んでべつと唾を吐いた。そのために、彼もまた捕へられて、答打られたとのことである。この事件は、單に新聞に載つたばかりでなく、町の人々は憤慨の餘り彼女に同情金を集めた程だつた。私も二十哥だけ寄附した。所が何うであらう。タラプイギナなど言ふ老婦人は全然此の町にはゐなかつたと言ふことが今になつて判つた。私もわざ／＼墓地の慈善院まで出掛けて行つて調べて見たが、其處でも、タラプイギナと云ふ名前は聞いたこともないとのことだつた。それどころか、私が市中で行はれてゐる噂を話した所、全く腹を立てたくらゐだつた。私がこの實際居りもしないタラプイギナなどいふ人物の事を述べた譯は、ステパノ・トラプイモーヰチの身の上にも、此の女と同じ事が（此の女が實在したものとして）危く起りかけたからである。然るに、此のタラプイギナに關する馬鹿／＼しい噂は、何うやらステパノ・トラプイモーヰチ氏から出たものゝやうに思はれる。つまり噂が段々と擴まつて行く中に、妙に脱線してタラプイギナに早變りしたのかも知れない。

私が最も合點の行かないのは、何うして彼が、私の傍を迂り抜けたかといふ事である。彼は、廣場へ入るが早いとも何處へか姿をかくして了つたのだつた。私は、何かしら非常によくない事が持ち上りさうな氣がしてならなかつたので、廣場を廻つて、眞直ぐに知事邸の玄関へ彼を連れて行かうと思つたが、私は不圖好奇心を起し通りがりの人に訊ねたいことがあつて、一寸立止つてゐると、その間に彼は私の傍から姿を隠して、あたりにはモウいくら探しても見えなくなつてゐた。私は本能的にそれと感じて、最も危険な場所へ飛び込み、彼を探しにかゝつた。彼の橋もまた坂を迂り始めたなど、何物か私にさう感ぜしめた。果せる哉、彼はもう事件の眞たゞ中に入つてゐたのだつた。私は、いきなり彼の

腕を掴んだやうに覺えてゐる。けれども、彼は、限りなき威厳を示しながら、靜かに傲然と、私の顔を見詰めた。

『君』と、彼は何か張り切つた絃が断れでもしたやうな聲で言つた。『彼奴等が此處で、此の廣場で、我々の目の前で、あんな無作法なことをするなら、こんな奴がもし、……自由な行政權でも得たら、一體どんなことを仕出來かすか知れない……』

恚う言つて、彼は、憤懣の餘り全身を慄はせて、恐ろしい挑戦の欲望を面に浮べつゝ、二歩ばかり降つた所に、目を皿のやうに見張つて私達を見詰めながら立つてゐたフリプスエーロフの方へ、威嚇するやうな譴責するやうな指を差し向けた。

『こんな奴』彼はもう目の前が眞暗になつて了つてかう叫んだ。『こんな奴とは何だ、一體貴様は何だ。』と、フリプスエーロフは拳を握り固めながら詰め寄つた。『貴様は何だ？』と、物狂ほしい病的な聲で、彼は自暴にかう喚いた。斷つて置くが、彼はステパイン・トラフイモーギチ氏の顔をよく知つてゐたのだつた。もう一瞬間そのまゝにして置いたら、彼はステパイン・トラフイモーギチ氏の襟首を掴んだに相違ない。けれども好い鹽梅に、レムブケが聲のする方へ振り返つた。彼は熱心に、しかし思ひ惑ふやうにステパイン氏を見詰めてゐたが、突然腹立たしうに片手を打ち振つたので、フリプスエーロフは腰を折られて了つた。私は、ステパイン・トラフイモーギチを群集の中から連れ出した。尤も、或は彼自身でもう退去したくなつたのかも知れない。

『歸りませう、歸りませう』と、私は言ひ張つた。『私達が殴られなかつたのは、確かにレムブケのお蔭ですよ。』

『歸つて呉れ給へ、何うぞ。君まで飛んだ目にあはせようとしたのは、僕が悪かつたんだ。君には未來があり前途有望なんだ。でも僕は——僕の時代はもう終つたんだ。』

彼は、決然として知事邸の玄關口の上つて行つた。玄關番は私を知つてゐたので、私は二人ながら、ユーリヤ・ミハイロフナを訪ねて來たのだと言つた。私達は客間に腰を下ろして待つた。私は、此の友を一人うつちやつて置く氣になれなかつたが、しかし、この上彼にいろ／＼口を利いて無駄だと悟つた。彼は、まるで國家のために決死の覺悟でもした人のやうな顔附をしてゐた。私たちは、別々に離れて、それ／＼違つた隅の方に腰掛けた。——私は、入口の近くに、彼は私の方へ向ひてはゐるが遠く離れた所に席を占め、物思はしげに首を一方に傾けながら、ステッキに軽く凭れかゝつてゐた。そして左の手には例の鍔廣の帽子を持つてゐた。かうした私達は十分間ばかり腰掛けてゐた。

## 二

突然レムブケが警察署長を従へてせか／＼した足取りで這入つて來て、尙ほ氣のぬけたやうな眼附で私達を一瞥したが、別に注意も拂はず、そのまま右手の書齋へ入つて行かうとした。と、ステパイン・ト

ロフイモーヰチが、彼の前に立ちふさがつて、行手を遮つた。普通の人々は非常に異つてゐるステバ  
ーン・トロフイモーヰチのすねけて背の高い姿は、特別の印象を與へた。レムブフは立止つた。  
『これは誰だ?』と、彼は合點の行かないらしい様子で、署長に訊ねたかのやうに咬いたが、しかし、  
その方へ少しも顔を向けやうとはしなかつた。そして、いつまでも、ステバーン・トロフイモーヰチ  
をちら／＼と見廻してゐた。

『退職大學教授ステバーン・トロフイモーヰチ・ゾルホーゼンスキーです、閣下』と、ステバーン氏は  
物々しく頭を下げてかう答へた。閣下は尙ほ相手をおつと見守つてゐたが、でもそれは非常に鈍い表情  
であつた。

『何の用です』と、言ひながら、彼は大官らしい無造作な氣むづかしげな態度で腹たゞしさにステバ  
ーン氏の方へ耳を差向けた。多分、何かの願ひ事があつて罷り出た、ただの請願者だらうと、彼はやつ  
とかう合點した。

『實は、今日閣下の名を以て、一人の官吏が参りまして、私の家を搜索したので御座いますが、それに  
就きまして……』

『名は? 名は?』レムブフは突然あることを思ひ出して、急ぎ込みながらから訊いた。ステバーン・ト  
ロフイモーヰチは、一層物々しい調子で自分の名前を繰返した。

『あ! あ! あれた、……例の温床だ、……ねえ、君、君はあの方面からなんだらう……君は大學教

授だらう? 大學教授だらう?』

『嘗て、X大學で青年等に講演するの名譽を有しました。』

『青年等に!』レムブフはびくりとした様子であつた、尤も彼は、一體自分が誰に何を話してゐるの  
かまだはつきりと判らなかつたに相違ない。それは確かである。

『そんな事はね、君、斷じて許す譯に行かないのです』と、彼は突然恐しく腹を立て、言つた。『僕は青  
年等を許しません、それはみんな檄文なんですからね、それは君、社會に對する侵略なんですからね、  
海上侵略、つまりフリブチエール(海賊的行爲)ですからね……一體何の御頼みですか』

『それは反對です。あなたの奥さんが、明日の慈善會で、何か講演してくれと私にお頼みになつたんで  
す、私は何も御頼みに上つたものではありません。私はたゞ自分の權利を要求に來たのです……』

『慈善會だつて? 慈善會などはありません。僕は君等の慈善會は決してない。講演だつて? 講演  
だつて?』と、彼は氣でも狂つたやうに叫んだ。

『失禮ですが、閣下もつと丁寧な言葉を使つて頂きたいものです。まるで子供にでも有仰るやうに、頭  
ごなしに怒鳴り附けたり、地團太踏んだりしないやうにして頂きたいのですが……』

『君は、今誰と話をして居るか、多分判つておいでせうな?』と、レムブフは眞赤になつて言つた。  
『十分判つて居ります、閣下』

『君等は、社會を破壊してゐるが、僕は身を以て社會を守つてゐるのですぞ……君は、……さうだ、今

思ひ出したが、君はスタヴローギナ將軍夫人の家で、家庭教師をしてゐたんでせう？」

『さうです。わたしは、……そのスタヴローギナ將軍夫人の家で以て、……家庭教師をしてゐました。』  
『そして、二十年の間、今日まで積り積つたすべての物の温床となつてゐたんでせう……すべての果實の……何だか僕は今廣場で君を見受けたやうですな。氣をつけたまへ、君、氣をつけたまへよ。君等の思想の傾向はちやんと判つてゐます。僕は君を警戒してゐるのですよ、僕はね、君の講演などを許す譯には行きません。斷じて許せません。そんな請願なんか僕の所へ持つて來ないでくれたまへ……』

彼は再び通り抜けようとした。

『繰り返して申しますが、閣下は思ひ違ひをしてゐられます。あなたの奥さんが私にお頼みになつたのです。そしてそれは講演ではなく、明日の慈善會で何か文學上の話をして呉れと頼まれたのです。けれども、今の場合、私は、そんな御依頼は、私の方から御断りします。たゞお願ひしたいのは、一體何う言ふ工合で、何のために、如何なる理由で、私は今日のやうな家宅搜索を受けたのか、それを説明して頂きたいんです。私は幾冊かの本と、書類と、私に取つて大切な私信を沒收され手車に載せて町中を引き廻されたんです……』

『誰が搜索したのです』と、レムブケはぎくりとして、すつかり我れに返つた。そして突然顔中眞赤になつた、彼は署長の方をちらりと振向いた。その瞬間、戸口に、背中の屈んだひよる長い、無格好なブルームルの姿が現はれた。

『やあ、此の役人ですよ』と、ステパイン氏は彼を指した。

ブルームルは、如何にも悪かつたと言ふやうな、けれども少しも耻ぢた様にもない顔附で前へ進み出た。

『君は、こんな馬鹿けたことをしかなないのだね』と、レムブケは、忌々しさと腹立たしさとで、投げつけるやうにかう言つた。彼は、突然様子が變つて、一時に正氣づいたやうであつた。

『失禮しました。……』と、彼は全く間違つて、益々顔を赧らめながら吃り／＼かう言つた。『あれはみんな……みんな何うも失策らしいのです。誤解なんです。……たゞほんの誤解なんです。』

『閣下』と、ステパイン・トロフィモフは口を出した。『私は賞て若い時分、或る興味ある一つの出来事を目撃しました。劇場の廊下で、誰か一人の男が、今一人の男に走りかゝつて、大勢の前で其の横つ面をびしやりと撲つたのです。所が、それは一寸顔附が似てゐたゞだけで、よく見ると、全くの人違ひだつたのです。すると、其の撲つた方は、時間は貴重だと言はんばかりに、せか／＼しながら、腹立たし／＼さうな調子で、丁度只今閣下が仰有つた通りに「間違ひました……失禮しました、これは誤解でした。たゞほんの誤解でした」と言つたものです。』けれども、撲たれた方の男が、いつまでも腹を立て、喚いでゐるものですから、さも忌々し／＼さうな調子で、かう言つたものです。『だつて、僕は、ほんの誤解だと言つてるぢやありませんか、何だつて君はいつまでも大きな聲をしてゐるんです』

『それは、……それは勿論非常に滑稽な話ですが……』と、レムブケは、苦笑を浮べた。



「併し……併し僕自身が如何に不幸であるかを察して頂けませんか？」  
彼は殆ど叫ばうとしたが、またやつと両手を顔を蔽ひさうにした。

此の思ひがけない哀れな叫び聲、いや寧ろ歎歎の聲は、殆ど堪へられない程だった、それは恐らく、昨日から今日にかけて、始めて十分に明瞭に、一切の出来事を自覺した瞬間であつたに相違ない。――が、それに續いて、自分で自分に裏切るやうな、情けない絶望が襲つた。――もう一瞬間の間があつたら、或は廣間一杯に響き渡る様な聲で、すゝり泣きをしたかも知れない。始めステパーン・トロフイモ一井一チは、きよとんとして對手を見守つてゐたが、やがて突然頭を下げて、情のこもつた聲で、しみりと口を切つた。

「閣下、もう私のつまらない不平などで御心配なさらずに、何うかわたしの本と手紙とを戻すやうに御命令なすつて下さい……」

彼の話は途中で遮られた、此の時丁度ユーリヤ・ミハイロフナが、大勢の取巻き連と一緒にどやどやと歸つて来た。此の點は、出来るだけ詳しく述べたいと思ふ。

三

まづ最初、三臺の馬車に一杯乗つてゐた連中が皆、どや／＼と廣間へ入つて来た。ユーリヤ・ミハイ

ローヴナの居間への入口は別になつてゐて、玄關からすぐ左手についてゐた。けれども此の時は皆、廣間へ入つて了つたのだつた。――想ふにこれは、丁度其處にステパーン・トロフイモ一井一チが居合せたからに相違ない。と言ふのは、同氏の身に起つた事も、シビグーリンの職工の事もみんな、町へ入るや否やユーリヤ・ミハイロフナの耳に入つたからである。これを知らせたのは、リヤムシンであつた。彼は、何か失策をやつて、今日の訪問には加へて貰へなかつたばかりに、誰よりも早くあの出来事を知つたのだつた。彼は、意地の悪い悦びを感じながら愉快な報告を傳へてやらうと、やくざな哥薩克馬を借りて、歸つて来る一行を迎へに、スクグレーミニキイを指して、街道傳ひに飛ばしたのだつた。私の考へでは、追が男勝りのユーリヤ・ミハイロフナも、かうした思ひがけない報知に接した時には、矢張り幾らか間誤つたに違ひない。尤も、それはほんの一瞬だつたかも知れない。例へば、此の事件の政治的方面には、夫人は別に心を煩はす筈もなく、まだ、ビョートル・ステパノ一井一チが、既に四度ばかりも、シビグーリンの暴れ者共は一人残らず、ぶん撲つてやらねばならぬと、夫人の頭に吹き込んでゐたからである。そして、ビョートル・ステパノ一井一チは、實際もうすつと以前から、夫人にとつては、絶對的な權威となつてゐたのである。

「でもね、わたしは、あの人に此のお禮をして上げるんだから」と、夫人は屹度、かう言ふ風に獨言ちたに相違ない。あの人と云ふのは、勿論良人を指してゐるのである。次手に斷つて置くが、ビョートル・ステパノ一井一チは、わざとのやうに今日の訪問には加つてゐなかつた。それに、朝から誰一人、

彼の姿を見たものがなかつた。もう一つ附言して置かねばならぬのは、ブルツラ・ベトロウナも自宅に客人達を迎へた後、ユリヤ・ミハイロウナと一つの馬車に乗つて、皆と一緒に町へ歸つて来たことである。それは、明日の慈善會の事に就いて、最後の打合せに列席するためであつた。で、リヤムシンの齎したステバイン・トロフイモーギイチに關する報知は、彼女にも矢張り興味を抱かせたに相違ない。いや事に依つたら、どきりとしたかも知れない。

レムブケに對する仕返しは直ぐに始まつた。可哀相に、彼は、自分の美しい妻を一目見るなり、早速その事を悟つたのだつた。晴々した顔に、人を魅惑するやうな微笑を浮かべながら、彼女は足早やにステバイン・トロフイモーギイチに近づいて、精巧な手袋を穿めた手を差し伸べた。そして、何とも言へぬ愛嬌のこもつた言葉を振り撒くのだつた——まるで朝の間ぢう、彼を訪ぬあぐんで、やつとの事で、自分の家へ来て貰つてゐたお禮に、出来るだけ優しく款待したいといふ一念の外、何にも考へてゐなかつたやうな様子で……。今朝の家宅搜索の事に就いては、少しも知らないかの様に一言も口に出さなかつた。そして、良人に對しては、一口も物を言はず、また見向きもしないで、まるでそんな人は廣間にゐないかのやうに振舞つたそればかりでなく、早速ステバイン・トロフイモーギイチを獨占して、客間の方へ連れて行つて了つた。——まるで、彼とレムブケの間には、何の用事もなかつたかのやうに、またあつた所で、そんな用事なんか何うせつまらないとでも言ふ様な態度であつた。繰り返して言ふが、私の眼に映じた所では、ユリヤ・ミハイロウナは、出来るだけ高尚な調子を持してゐるに拘らず、今

度もまた一大失策を演じたのだつた。これは、カルマジノフが大に手傳つたのである。(彼は、ユリヤ・ミハイロウナの特別な頼みに依つて、今朝の遠乗りに加つた。随つて、間接ではあるが、愈々ブルツラ・ベトロウナを訪問した譯である。それをブルツラ・ベトロウナは夢中に悦んだのだつた)まだ戸口を這入り切らない中から、(彼は一行の一番後から入つて来たからである)ステバイン・トロフイモーギイチの姿を見るや、大勢で彼は呼びかけた。そしてユリヤ・ミハイロウナと話中なのも構はずに、其の傍へやつて来て抱きついた。

『幾年振りだらう、幾年振りだらう、やつとのことで……優れたる友よ』

彼は恰も接吻しようとするやうにした。勿論頬つべたを突きつけたのである。ステバイン・トロフイモーギイチはすつかり面喰つて了ひ、餘蘊なくその頬に接吻しない譯に行かなかつた。

『君』と、彼は、其の晩一日の出来事を追想しながら、私を振り向つてかう言つた。

『僕はこの瞬間、一體我々二人の中何方が餘計卑劣なんだらう。其の場で僕を辱しめるために抱きしめたあの男か、それともあの男を蔑視しあの男の頬を卑しみながら、顔を外向けやることも仕得ないで、のめ／＼其の頬を接吻した僕だらうか?……ちよつ』

『さア、話して下さい。あれからの貴方の身の上話をすつかり聞かせて下さい。』と、まるで二十五年間の生活を一時に、すつかり話して了ふことが出来るかのやうに、カルマジノフはねち／＼と舌つたるい聲でかう言つた。こんな馬鹿／＼しい輕薄な物の言ひ方が「高尚な」調子なのであつた。

「あなた覚えておますか、私があなたと最後に莫斯科で會つたのは、グラノーフスキ伯爵の祝宴席上でしたね、あれからも二十四年経ちました……」と、ステパン・トロフィモフは恐ろしく四角張つた事を（従つて恐ろしく高尚な調子とはかけ離れたことを）言ひ出した。

「實際懐しい人だ」と、もう餘りだと思はれる位親しげに相手の肩を掴みながら、カルマジノフは金切り聲で、馴れ／＼しくかう遮つた。

「さア早く、わたし達をあなたのお居間へ案内して下さい、ユーリヤさん、此の人が、腰を下した上で、何も彼も話してくれますよ」

「だがね、僕はあんな癩癩持の老いぼれ姿みたいな男と、今迄一度だつて親しくしたことはないんだよ」と、ステパン・トロフィモフは、其の同じ晩、憤りの餘り身を慄はせながらかう私に訴へ續けた。「……僕はまだほんの子供の時分から、あの男が憎くて堪らなかつたのだ。……勿論あの男の方でも、僕に對して同じ心持を持つてゐるに相違ないさ」

ユーリヤ・ミハイロフナの客間は、忽ち一杯になつた。ブルグラー・ベトロフナは、冷靜を装はうと努めてゐたが、却つて興奮し切つてゐるのだつた。私は、彼女が、二三度カルマジノフの方へは、憎惡に充ちた視線をステパン・トロフィモフの方へは、と愛情から生じた忿怒の視線を注いだのに氣がついた。今若し、ステパン・トロフィモフが、何かのはづみで、馬鹿間違ひをやらかして、一同の前で、カルマジノフに遣り込められでもしたら、

彼女はすぐさま跳りかゝつて、彼を撲りつけもし兼ねまじい様子であつた。私は、其處にリザも居合せたことを言ひ忘れてゐた。彼女は、これまで、見たことのない程、如何にも嬉しさに、何の心配もなさうに浮々として、幸福らしい様子だつた。マヴリーキイ・ニコラエーフも、勿論其處に居合せたのである。其の他尙ほ、何時もきまつてユーリヤ・ミハイロフナの取巻を勤めてゐる若い婦人連や、可なり放埒な青年などの中には、此の連中は、放埒を快活とし、安價な皮肉を才智と思つてゐた。二三の新しい顔も見受けられた。それは、丁度此の町に立ち寄つた、恐しくちよこまかする波蘭人と、のべつに自分で自分の機智をさも愉快さうに大きな聲で笑ひ興じてゐる、頑丈な獨逸人の老醫師と、それから、彼得堡から來た非常に若い公爵などであつた。公爵はまるで自動人形のやうな格好で、恐ろしく高い襟をつけ、さも國家の大人物らしく氣取つて澄まし込んでゐた。併し、ユーリヤ・ミハイロフナは、非常に此の客人を大切に扱つて、自分の客間が此の人に與へる印象を、大分氣にしてゐる様にさへ見え

「ねえ、カルマジノフさん」と、ステパン・トロフィモフは、繪に描いたやうに恰好よく長椅子に腰を下ろしながら、カルマジノフにも負けないやうなねち／＼した舌たるい口調で、突然かう言ひ出した。「ねえ、カルマジノフさん、我々のやうに、前時代に屬して、而も一定の信念を抱いてゐる人間の生活は、もう新時代に這入つてからも二十五年になりますが、それでも矢張り單調に見えるに違ひありませんね……」

多分、ステバイン・トロフイモイギイチが何かとてつもない滑稽な事でも言つたやうに思つたのだらう、獨逸人は丁度馬の嘶くやうな高い引き千切つたやうな聲で笑ひ出した。ステバイン氏は、わざと吃驚したやうな顔附をして、ちつとその獨逸人を見詰めたけれども、それは何等の効果をも齎さなかつた。公爵も、例の高い襟と一緒に、獨逸人の方へ首を振ちて、鼻眼鏡をさし向けたが、でも好奇の色は少しも浮んでゐなかつた。

「……單調に見えるに相違ありません。」と、ステバイン・トロフイモイギイチは、出来るだけ無作法に、一語／＼長く引伸ばしながら、わざと慥／＼繰返した。「此の二十五年の間に於ける私の生活も、丁度その通りなものでした。實際何處だつて道理よりも坊主の多い世の中ですよ。私も全然此の諺と同じ考へです。随つて此の二十五年間に於ける私の生活は……」

「まア、坊主とは面白うございますね」と、ユーリヤ・ミハイロフナは、自分のすぐ傍に腰掛けてゐるブルグラー・ベトロフナの方へ振り向いてかう囁いた。

ブルグラー・ベトロフナは得意げな眼附でこれに答へた。けれども、カルマジノフは、此の佛蘭西語の成功を、黙過してゐることが出来なかつたので、急に例のきい／＼聲を上げてステバイン・トロフイモイギイチを遮つた。

「私は、もうそんなことには平氣ですよ。私は今年でもう七年間、カルス、ルーエに落着いてゐますからね。そして去年など、町會で水道敷設が決議された時も、私は此のカル、スルーエの水道問題の方が、

露西亞の所謂革命時代に生じた國家的諸問題よりも、遙かに親しみのある貴重なものだと、本當に心底から感じたやうな譯です」

「御同情に堪へませんね、しかし私の眞情は異います」と云つて、ステバイン・トロフイモイギイチは、意味深さうに頭を下げながら、吐息をついた。

ユーリヤ・ミハイロフナは、得意満面であつた。會話が、深味のある政治的方面に向いて來たからである。

「それは、下水道ですか」と、醫者が聲高かに訊ねた。

「水道ですよ、ドクトル、水道ですよ、私はその設計案を作るのに手傳ひをした位です」

醫者は、何か破裂したやうに笑ひ出した。それに續いて他の一同も、今度はもう無遠慮に、彼に向きつけて笑つたが、彼はそれには氣がつかないで、たゞみんなと一緒に笑ふので、更に大恐悦であつた。

「失禮ですが、カルマジノフさん、私は貴方の御考へとは違ひます」と、ユーリヤ・ミハイロフナが急に口を入れた。「カル・スルーエのことはまア結構で御座いますが、全體貴方は、物事を胡魔化して丁ふのがお好なので、今の貴方のお言葉は何うも本當にすることが出来ません。一體露西亞の文學者の中で、あれ程豊富な現代人の典型を啓示し、あれ程多くの現代的問題を提出し、現代的活動家の型を形作るべき、最も生動した現代的要素を指示した人は誰でせう。それは貴方です、貴方一人切りです、外には誰もありません。それなのに、今更自分の國に對して冷淡になつたの、カル、スルーエの水道に熱

中してゐるのなんて、そんな事を人に信じさせようとなさるんですもの！ ぼ、ぼ……」

「左様、私は勿論」と、カルマジノフは、またねち／＼した聲で「……ボーゴジエフのタイプで、汎スラヴ主義者のあらゆる缺點を指摘し、ニコジモフのタイプで、西歐主義者のあらゆる缺點を暴露しましたよ……」

「ふん、あらゆると来たね」と、リヤムシンが小さな聲で囁いた。

「しかし、それはね、たゞ一寸、何とかしてうるさい時を潰すために、同胞の執拗な要求を満足させるためにやつたのですよ——」

「ステバイン・トロフィモフ・ギーチさん、貴方は多分御承知でも御座いませうが」と、ユーリヤ・ミハイロヴナは、熱心な調子で言った。「明日私達は立派な詩を聴かして頂けるので御座いますよ、……それはカルマジノフさんの最近のお作の一つで、美しい藝術的感興の結晶で御座いますのよ、——題は「感謝」と申すのです。その詩で尙ほ、今後はもう何も書かぬ、如何なることがあつても世間へは出ない、たとへ天から天使が降りて来ても、また上流社會の人達がみんな總が／＼りて頼んでも、此の決心は斷じて變へない、といふ宣言をなしますのです。實際カルマジノフさんは、永久に筆を折られるので、此の美しい「感謝」は、これまで幾十年かの間、絶えず露西亞の高潔な思想のために盡された努力に對して、社會が常に歡喜の念を拂つて呉れたのを、感謝する意味で書かれたのださうで御座います。」

ユーリヤ・ミハイロヴナは、幸福の頂上に立つてゐた。

「さうです。私は別れを告げる積りなんです。私は、自分の「感謝」を述べて去る積りです。そして……あの……カル、スルーエで……まア眼を瞑らうと思つてゐます。」カルマジノフは、次第にセンチメンタルになつて来た。露西亞の文豪の多くは皆さうであるが（露西亞には文豪が矢鱈に澤山ゐる）彼は、賞讃の辭を平氣で聞いてゐることが出来なくなり、何時もの機智にも似合はず、直ぐに氣弱くなりかけた。併しこれなどは、まだ罪の浅い方だと私は思ふ。噂に依ると、露西亞の沙翁の一人は、普段の話の中に、「我々の如き偉人は、それより外に仕方がないのだ」と、露骨に言ひながら、而も自分ではそれに氣がつかないさうである。

「カル、スルーエで私は眼を瞑る積りです。吾々偉人は、此の世に於ける自分の義務を果したら、報酬などを要めないで、少しも早く眼を瞑るより外ないのですからね、私もその通りにするのです」

「何うか御住所を教へて下さい。私はカル、スルーエへ出掛けて、貴方の墓へ詣りますから！」と、獨逸人が、突拍子もない聲でから／＼と笑つた。

「今日では、死骸でも鐵道で運びますからね。」と、餘り目立つ方でない青年の一人が、思ひがけなくもこんなことを言つた。

リヤムシンは、もう夢中になつて喜んだ。ユーリヤ・ミハイロヴナは、顔を擧めた。其處へニコライ・スタヴローギンが入つて来た。

「おや、あなたは、警察へ拘禁されたと聞きましたかね」と、彼は誰よりも先きに、ステバイン・トロ

ファイモール井一チの方へ向いて聲高かに云つた。

「いや、あれは一寸とした軽卒な出来事なんだよ」と、ステパーン・トロフィモール井一チは洒落を言つた。

「けれども、私はその出来事が、あのお依頼申したことに少しも影響しないこと、楽しんで居ります——」と、ユーリヤ・ミハイロフナがまたもや口を入れた。「私は、今もなほ、それが何の事だか合點が参りませんけれど、兎に角貴方は、あんな不快な出来事なんかには氣をお留めにならないで、私達の熱心に期待してゐることを裏切らないで下さいませぬ。明日の文學會で貴方の講演をお聴きするのを皆樂しみにしてゐるのですから、何うかそれに間違ひのないやうにお願ひ致します」

「さア、何うしませうかね、私も今は……」

「本當にね、ブルゾーラ・ベトロフナさん、私達程不幸なものもありませんわ……本當に何うでせう。露西亞でも最も有名な獨創的な思想家の一人とお懇意になる日が、少しも早く来ればいいと待ち焦れてゐましたのに、——まあステパーン・トロフィモール井一チさんは、出し抜けて私達から離れ度いやうな口振りをお洩しになるぢやありませんか」

「何うも賞讃のお言葉が餘り大仰なので、勿論私は、それを聞かない振りしなければならぬのです」が、ステパーン・トロフィモール井一チは、上手にかう言つた。「私のやうなつまらない者が、明日のお催しに、それ程必要だらうとは信じられません、けれども私は……」

「や、あなたは父を増長させてお了ひになりますよ」と、ビョートル・ステパノール井一チが室へ駆け込みながら慪う言つた。「僕がやつと父を自分の手に引受けたと思ふと——今朝突然家宅搜索、逮捕と言ふ始末になつて、巡查が父の襟首を引つ掴んだと云ふ話なんでせう。所が此處へ来て見ると、知事の廣間で貴婦人方にちやほやあやして貰つてゐるんです。屹度嬉しさの餘り身體中の骨が一本／＼疼いてふことでせう。こんな果報は夢にも見たことはないでせう。見てらつしやい、今に社會主義の密告を始めますから……」

「そんなことがありますものか、ビョートル・ステパノール井一チさん。社會主義もまた偉大な思想ですもの、ステパーン・トロフィモール井一チさんがそれをお認めにならない譯はありませんよ」と、ユーリヤ・ミハイロフナは、勢ひ込んで辯護した。

「偉大な思想には違ひありませんが、その宣傳者が誰でも偉大な人物だとは言へません、まあお前、此のあたりでもう止めて置かうぢやないか。」と、ステパーン・トロフィモール井一チは我子の方へ向いて、慪う言葉を結びながら、美しい姿勢を示しながら席を立つた。

併し此の時、全く思ひがけない事が持ち上つた。フォン・レムブケは、もう可なり前から此の室に来てゐたが、誰もそれに氣附ない様子であつた。尤も彼が這入つて来る所は、一同皆知つてゐたのだつた。ユーリヤ・ミハイロフナは、前から決心してゐた通りに、尙ほ良人があるかなしかにあしらつてゐた。レムブケは、戸口の近くに席を占めて、嚴つい沈んだ顔附をして一座の會話に耳を傾けてゐた。今朝の出

來事を匂はすやうな話を聞くと、何となく彼は不安さうにもざ／＼し始めた。そして、例の糊のよくきいた馬鹿に高いから——に驚いて、公爵をちつと見詰めてゐた。が、突然ビョートル・ステパノフ・ギーチの聲がして、彼が飛び込んで來ると、ぎくりとしたやうであつた。けれどもステパイン・トロフイモフ・ギーチが社會主義に就いて、例の莊重な一句を言ひ終るや否や、その中間に居合せたリヤムシンを突きつけて、彼の傍へつか／＼と近寄つた。リヤムシンは、わざとらしく、さも驚いたやうに、すぐ跳び退いて、肩を擦りながら、如何にも酷くやつつけられたといふやうな身振りをした。

『澤山だ!』と、フォン・レムブケは、呆氣にとられたステパイン・トロフイモフ・ギーチの手を烈しく引つ攔んで、力一杯握りしめながらかう言つた。『澤山が、現代のフリブスチユール(海賊等)はちやんと判つてゐる。もう一言も費す必要はない、既に相當の方法は講じてあるんだ……』

彼は室一杯に響き渡るやうな大きな聲で、かう言ひながら、いきまいて最後の一句を結んだ。一座は全く白らけ切つて了つた。一同は何となく不安な心持を感じた。ユーリヤ・ミハイロフナの顔は蒼くなつた。更に又、一つの馬鹿げた出來事が、尙ほ一層効果を強めたのだつた。相當の方法を講じたと言つ告すると、レムブケは、くるりと向きを變へて、足早やに室を出て行つた。が、二足ばかり行くと、絨氈の端に突きかゝつて、思はず前へのめり、危く其の場へ倒れやうとした。で、その瞬間一寸立止まつて、その突きかゝつた場所を見詰めながら、『これは取り變へねばならぬ』と呟いたが、そのまゝ戸の外へ消えて了つた。ユーリヤ・ミハイロフナも其の後から續いて駆け出した、彼女の出て行つた後はがや

／＼で何が何やら判らなくなつて了つた。

『少し變なんだ』とか、『よ、あゝ云ふ風になるんだ』とか言ふ聲が聞えた。中には指で額を指す者もあつた。隅の方にゐたリヤムシンも、二本指を額の少し上に當てた。何かしら家庭内の出來事を仄めかすものもあつたが——勿論すべてひそ／＼聲だつた。誰一人帽子に手を掛ける者もなく、皆はたゞちつとして待ち設けてゐた。ユーリヤ・ミハイロフナは、その間何をしたか判らないけれども、五分間ばかり経つてから、一生懸命に平靜を装ひながら引返して來た。彼女は、曖昧な調子で、レムブケは少し興奮してゐるけれど、別に大したことはなく、あれは子供の時分からの病氣なんで、自分の方が「却つてよく」知つてゐるのだが、勿論明日の慈善會に出たら心が引き立つて來るに相違ないと答へた。それからまたほんの社交上の禮儀のために過ぎないが、二言三言ステパイン・トロフイモフ・ギーチにお愛想を言つた後、今度は少し聲を張り上げて、準備委員會の人達に向ひ、今直ぐ評議會を開いて頂き度いと言ひ出した。それで、委員會に關係のない人達は、歸る支度をし始めた。けれども此の不吉な朝の厭やな出來事は、まだ全く終つたのではなかつた。

私は、先刻ニコライ・スタウロギンが入つて來た瞬間から、リザが素早く其方へ視線を向けて、ちつと一心に見入つてゐたのに氣がついた。そして其の後も尙ほ、いつまでも目を離さなかつたので——終ひには人の注意を惹く程になつた。見ると、ヴリーキイ・ニコラエフ・ギーチは、後から彼女の方へ屈み込んで、何か彼女に囁かうと思つてゐる様子であつたが、急に又思ひ直したやうに、まるで罪で

も犯したやうな目附で、あたりの人々を見廻しながら、あはて、身を引いて了つた。ニコライ・フシエボロドフ・ギンも亦一座の好奇心を呼び起した。彼の顔は何時より餘計蒼褪めて、眼附もきよとくして落着きがなかつた。彼は室へ入りしなにステパン・トロフィモフ・ギンに例の質問をかけたながら、すぐそのことを忘れて了つたらしかつた。のみならず、女主人の所へ挨拶に行くのさへ忘れてゐるのではないかと思はれる程だつた。リザの方もまるで見ようとしなかつた。——それはしかし、決して見たくなかつたからではなく、矢張り彼女に全然気がつかなかつたからに相違ない。ユーリヤ・ミハイロフナが一刻も早く最後の評議會を開かうと提議した後、一寸の間一座は森となつたが、その時突然、リザの甲高い、わざと大きく張り上げた聲が響いた。彼女は、スタヴローギンを呼び掛けたのだつた。

「ニコライ・フシエボロドフ・ギンさん、貴方の親戚だとか言つて、何でも、貴方の奥さんの兄弟で、レビヤードキンとか被仰る大尉の方が、貴方のことを色々と讒訴して、何かしら貴方に關係した秘密を知らせてやるといふやうな、随分無様な手紙を、始終私の所へ寄越すのですよ。もしその方が本當に貴方の御親戚でしたら、何うかその人にも、私を侮辱しないやうに有仰つて下さい。そしてもうそんな不快な目にはせぬようにして下さい。」

是等の言葉の中には、絶望的な挑戦が響いてゐた。——それはすべての人にも汲みとれた。彼女自身、自分でも驚いた程の露骨な難詰であつた。それは丁度、人が目を閉じて、屋根から飛び下りるやうな鹽梅だつた。

けれどもニコライ・スタヴローギンの答へは、最も驚く可きものであつた。

第一彼は、不思議なことに、少しも驚かないで、飽まで冷靜な注意を以て、リザの言葉を聞いてゐた。彼の頭には、何等狼狽の色も忿怒の陰も映らなかつた。彼は、此の不吉な質問に對して、率直に、きつぱりと、立所に答へた。

「さうです。不幸にして、私はあの男と親戚の關係になつてゐます。私は、あの男の妹の良人となつて、もう殆ど五年になります。あなたの御要求は間違なく早速傳へて置きます。そして、今後あの男があなたに御迷惑をかけないやうに、私自身が責任を引受けます。」

私はその時、ブルグーラ・ペトロフナの顔に描かれた恐怖の表情をいつまでも忘れることが出来な。彼女は取亂した様で、椅子から立上り、何か防禦でもするやうに右手を前へ差し伸じた。ニコライ・フシエボロドフ・ギンは、母とリザと一座の人達をぢろりと見廻したが、突然量り知れぬ傲慢な微笑を浮かべながら、悠然として室を出て行つた。彼が去るのを見るや否やリザは安樂椅子から跳り上つて、直ちにその後を追蒐けやうとした。けれどもやつと自ら制して、彼を追蒐けることは止めた。やがて彼女は、誰にも一言の挨拶もせず、また見向きさへしないで、靜かにその室を出て行つた。勿論その後からは、例のマヴリツキイ・ニコライエフ・ギンが周章で、追蒐けた。

其の夜の町の騒ぎといろ／＼の噂などに就いては、私はもう書くのを止めよう。ブルグーラ・ペトロフナは、町にある自分の家に閉ぢ籠つて了つた。そして人の噂によると、ニコライ・フシエボロ



ドギイチは、そのまゝ母にも會はずに、眞直ぐスクヴオレシニキイへ行つて了つたさうである。ステパ  
 ーン・トロフイモイギイチは、ブルグーラ・ペトロヴナに是非面會を許してくれと、其の晩私を使ひに立  
 てた。けれども彼女は私にも玄關拂ひを食はせた。ステパーンは全く悄氣返つて了ひ、涙をぼろ／＼流  
 した。「こんな結婚があらうか!! こんな結婚があらうか! 家庭に於けるこんな恐ろしいことがあらう  
 か」と、彼は幾度も繰り返し続けた。けれども彼は、カルマジノフを想ひ出して、酷く彼を憎んだ。  
 そして又、非常に勢ひ込んで明日の講演——藝術的天分の發揮——の準備にとりかゝつた。姿見の前に  
 立つて見たり、明日の講演に引用するために、是迄各種の控帳に書き留めて置いた、洒落や機智の文句  
 を整理したりした。

「ねえ、君、僕は偉大なる思想のためにするんだ」と、彼は明かに自分を肯定しながら、私に慫う言つ  
 た。「ねえ君、僕は二十五年の間沈黙してゐたけれども、今度突然活動し始めるんだ——何うなるか、そ  
 れは判らない——けれども僕は活動し始めるのだ……」

全集 キスフエイトスド  
 卷 五 第

大正十年五月十八日印刷  
 大正十年五月二十日發行

非賣品

不許  
 複製

編輯兼發行人	ドストイエフスキ全集刊行會
印刷者	右代美香 植村 栄 一
印刷所	宮 田 龜 六
發行所	大 成 社
	東京市日本橋區本町二ノ八
	東京市神田區西小川町二丁目六番地
	東京市神田區西小川町二丁目六番地
	株式會社 冬夏社
	東京市日本橋區本町二ノ八
	電話東京四五四六
	電話本局三一〇二

12.6.7

375  
47

終

